

書評

ふたつの警世の書

笠信太郎著『花見酒の経済』昭和三十七年二月

ロンドン・エコノミスト、河村厚訳

『驚くべき日本』昭和三十八年三月

長谷田彰彦

笠信太郎氏が『花見酒の経済』と題する一書で、近年の経済成長についての真剣な反省を要請し、広く一般の支持を得てから、ほぼ一年の後に、ロンドン・エコノミストが、日本の高度成長にみならえという、日本特集号を出版した。識者はみるように、これは日本経済を賞讃しているわけのものではなく、この奇妙な国民がとにかくうまくやっているのにはなにかわけがあるのであって、イギリス人もこの顕著な事例に注目して考えなおさねばいけないという一書である。

たしかに、ここ一〇年ほどの日本の経済成長は異常なものである。それは悪路を一〇〇キロのスピードでとばしている感がある。これをだまってみていられないというのが笠氏である

が、一方、悪路ものかわ一〇〇キロのスピードでとばしている秘密をつかまねばならぬというのがロンドン・エコノミストである。憂国の真情はひとの心をうつが、経済にはまたそれ自体の自律的な機構秩序がある。筆者は笠氏の書に対しアカデミックな検討がつけられるべき必要を痛感していたのであるが、いま、これと併せて対照的なエコノミスト特集の翻訳を手にして、これと併せて、もっとも理論的な観点から批判の筆をとりたいと思う。

二

「投資を目的とした商業銀行の融資額を次第に増加することが、通常の資本蓄積過程の代わりになる」というのが、かつて、アメリカ占領軍の経済政策担当者が、任を離れるに当たって、日本の経済人にきびしくいませしめた危険思想のひとつであったという。この教訓は、その後、経済界の指導的グループによって、つねに断乎として支持されてきたのであるが、それは、借金するのは健全でないという、極めて単純で、普遍的で、伝統的な信条にかなうものとしてであった。だれも正面から反対するものもないかわり、現実の行為において、これに文字通り従うものもなかったのである。

実際に、商業銀行の融資額は驚異的に膨張を続けたのであるが、生産設備の拡大の方も、同じく、驚異的であった。そして、ひとはあまりふれないのであるが、貯蓄の増加も、まったく同様に驚異的であったのである。それゆえ、商業銀行の当事者に

いわせれば、かれらは、公衆が自発的に貯蓄した預金を、企業の力強い投資計画の資金として貸出したに過ぎず、また、企業の側からみれば、その新しい資本設備の建設は公衆の節約によってまかなわれたのであり、最後に、公衆の側からみれば、かれらの貯蓄資金は、きわめて能率のよい工場や機械によって裏づけられていることになる。

企業の資金の主要な部分が、銀行借入れに依存していることは、もう一段階さきを見れば、それが公衆の預金に依存しているということである。銀行の信用創造で造出された新しい預金は、企業の投資の実施と同時に公衆の貯蓄預金となるのであるが、これをそのまま銀行預金の形でもつか、あるいは、株式、社債、または公債などにかえるかは公衆の選択にまかされている。公衆が、その貯蓄を株式、社債ではなしに、銀行預金の形でもつことを選択する傾向が強ければ、企業の投資資金は大きく銀行借入れに依存しなければならないのである。そして、さらに、もし、公衆がその預金のうちのいくらかでもを日本銀行券の形でもとうとのぞむならば、日本銀行の信用膨張、すなわち、悪名高きオーバー・ローンが必至となってくるのである。

つまり、商業銀行の信用膨張も、オーバー・ローンも、正常な資本蓄積過程と両立しないどころか、ある与えられた流動性嗜好の状態について、ある強度において、必然的に随伴する現象なのである。

現在、信用膨張が巨大なものになった理由に、近年における均衡財政の堅持がある。財政の赤字から公債が発行されるなら

ば、それらは銀行預金に次いで流動的な資産として公衆の流動性に対する需要を満足させるから、流動資産保有のパターンは大きく変化し、預金に対する偏重は解消する。しかし、政府が均衡財政をまもってきたからこそ、超過需要インフレでひどいことにならずにすんだのであって、現在の信用膨張やオーバー・ローンは、成功的であった健全財政のひとつの結果として理解されなければならない。

笠信太郎氏は、最近の日本経済の調子のうちに、なにか容易ならぬ事態がひそんでいるように危惧して、かつての軍事インフレの初期にみられた、なんとはなしのかねまわりのよさとの類推から、こんどの場合、商業銀行の野放図な信用膨張という悪役をつきとめられるのであるが、実は、これは悪役などではなく、いつもの狂言まわしにすぎないのであって、ただ、現在の日本では、その流動性の構造と、急速な経済成長のために、ひどく眼につきやすくなっているだけである。狂言まわしを悪役とみまがえれば、芝居の筋全体がなにか邪悪なものにみえてくるのは当然である。笠氏の杞憂はここから生じる。

三

信用膨張が、それ自体としては正常な過程であるとしても、その膨張の速度には問題が残るであろう。笠氏も、とくに、現在みられるような急速で巨大なそれを非難されているようである。

笠氏は急速な信用膨張によって物価が上昇を続けていると強

主張される。しかし、統計数字の示すところ、あるいは、われわれの日常の生活体験からも、はっきりと云えることは、工業製品の価格はむしろ低落気味であることである。明らかに上昇を続けているとみられるものは、サービスの価格、および、サービスの要素を主要な価格構成要素とする商品の価格である。それともうひとつは笠氏のいう最大の悪役、土地の価格であるが、これはあとでふれる。

現在の経済成長は、労働者一人当り生産高の上昇として進行する。そこで、経済成長とともに、資本利潤率が高まるということがないならば、実質賃銀率は経済成長と同率で上昇するわけである。さて、このとき、実質賃銀率が上昇するにはふたつの場合がある。ひとつは、貨幣賃銀率が変らないで、貸銀財価格が低落するという場合である。もうひとつは、貨幣賃銀率が労働生産性の上昇率とならんで上昇して、一般物価水準が不変に保たれる場合である。

さきの場合には、経済成長と同じ率で、貨幣価値の持続的な上昇がみられることになる。笠氏も指摘されるように、現在の貨幣制度において、通貨管理の基本的目標は、いうまでもなく、貨幣価値の安定である。その下落は、もちろん、絶対に回避しなくてはならないが、これと同じ理由から、その上昇もまた許容されてはならない。それは、貨幣価値の下落も上昇もともに経済における公平と信頼を侵害するものだからである。

経済成長下にあつては、それゆえ成長とともに賃銀率が上昇してゆかなければならない。したがって、その間において、各

種サービス財などのように、その労働生産性の上昇が僅かしか期待されないもののコストの上昇はさげられないから、それらの価格は、需要の代替の弾力性、および、需要の所得弾力性に応じて多少の騰貴をみせることがある。しかし、これと相殺的な工業製品価格の低落がみられる以上、この価格現象をインフレ的とみるのはあたらない。それゆえ、持続的な好況のうち、貨幣価値も安定してきたのであるから、このところの日本の成長の速度はほぼ適当であったといつてよいであろう。適当な速度の資本蓄積過程が、与えられた流動性選好の状態からみて適当な程度の銀行信用の膨張によってファイナンスされている。膨張する信用残高は成長する経済から需要される拡大する流動性残高に吸収されているわけであるから、これだけの信用膨張の進行は適切であり、かつ、必要であるといつてよい。

公衆の銀行預金保有と、それに見合う企業の実物資本の増加とに注目すれば、なにも心配することはないのに、笠氏は銀行信用と企業の借入残高の増加にばかり気をとられている。だから、信用膨張は、ただ、経済のかねまわりをよくして、実力以上にかれた気分させるだけのものだということになる。笠氏の著書の題名にひかれた花見酒の比喩の卓技さは、信用膨張でおどりでた酒三升が、信用膨張の手拍子であっけなく消えてしまうおかしさにあるのだが、実は、この種の信用膨張は、現在の日本経済では、まだほんの始まったばかりのものである。

この種の信用膨張とは消費者信用の増加である。これはその残高に見合う生産的資本の蓄積を伴わない点において、軍事公債

発行に伴う信用膨張と同じであるが、いままでのところ、それは極めて僅かの影響力しかもっていなかったといつてよい。さきの比喩にかえていうならば、信用膨張でとびだした酒三升をだれかに飲ませてしまうための信用膨張はまだほとんど行われていないのである。

笠氏の警告は、現在までの高度成長に対してでなく、いま、ようやく盛んになった公債発行論に向けられるべきであらう。消費的財政支出が信用膨張によって賄われるようなことがあれば、日本経済の成長力からいって、超過需要インフレーションは避けられないであらう。

四

笠氏は、信用膨張は、投資を目的とするものであれ、軍事支出を目的とするものであれ、つねに、水増しの要素があるという考えにとらわれているために、かつての軍事公債のない今日も、それに代って水増しを可能にしている要因がなにかないればならないと考え、それを暴騰を続ける土地価格に求めるといふ誤謬におちいつている。

土地の価格は地代の資本化価値であることはいうまでもないが、地代は理論的には土地の限界収益性によって決定される。それゆえ、新鋭の資本設備が集中的に投入され、その上で雇用される労働の生産性が急速に上昇を続けている新工業地帯などの地価が急騰するのはむしろ当然である。地価の上昇は、決して、笠氏がいうように、物価の上昇ではない。もし、そういう

ならば、われわれは労働の生産性に見合う賃銀率の上昇をも物価騰貴といわなければならない。

地価の急騰は急激な経済成長の結果である。もちろん、地価の騰貴が大幅で、しかも確実であったから、多くの投機的活動が土地に対して行われ、それがまた、地価の高騰に油を注いだことは確実であらう。しかし、銘記すべきことは、かくも激しい地価の騰貴にもかかわらず、新設の資本設備によって生産される工業製品のコストがむしろ下り気味であることである。いままで、麦を作っていた土地が自動車工場となれば、麦作農家の単位面積当り剰余と自動車工業とのそれとの差に相応するだけの収益の差が土地所有者に、地価高騰という形で帰属するのはやむを得ないであらう。

笠氏は土地に対する投機が地価を高騰させ、この土地が、かつて際限なく発行された軍事公債と同様に、実体のない担保力となつて、信用膨張を大水のように拡大させていると説かれる。しかし、真実はこの逆であつて、信用創造によって推進された経済成長によって、成長産業の立地条件に適合した土地の収益力が急激に上昇して、その地価が高騰しているという極めて着実な話なのである。同時に、実質賃銀の上昇は、あらゆる用途の土地の収益性を上昇させ、一般的な地価高騰がみられるのである。軍事インフレ時代には、実質賃銀の上昇も、地価の一般的高騰もみられなかったことを想起すべきである。

五

さて、右にみたように、地価の騰貴が、信用創造の推進力ではなく、逆に、その結果であるとする、われわれはこの信用創造の真実の起動力をあらためて問わねばならなくなる。

ロンドン・エコノミストは、日本の経済を拡大投資の大道にのせてきたのは、成長産業に内在する潑刺たるダイナミズムであるという。そして、日本は、なお、十分に開発された工業経済への移行の途上にあるという、ごくあたりまえの経済的利点をもっているという。それは、生産性の高い部門へ吸収できる労働力を抱えている生産性の低い部門がなお残っているという事実である。そして、毎年、財政支出の大幅な拡張と減税とによって、需要の増加が確保され、一方、金融政策的に、高能率産業に対しては集中的に信用が与えられることによって、いまみられるような成功がおさめられたという。

なにか需要の増加を確保する要因があり、なにかインフレを抑えておく要因があったに相違ないというのは、いかにも、イギリスのエコノミストらしい視点であるが、実際には、極めて高率の貯蓄率にもかかわらず、需要の確保は問題にならないほどに、投資の増加率が高かったのである。急速な技術進歩の下における果敢な私的投資が高度成長の核心をなしているといつてよいであろう。これは、ハロッドの成長理論のタムムというならば、自然成長率が極めて高く、しかも、現実の成長率、すなわち、企業者の投資増加率も極めて高かったということであるが、われわれは、ロンドン・エコノミストの看過しているもうひとつの成長率、すなわち、必要成長率が、やはり、極めて

高いことを注意しておかねばならない。

必要成長率のひとつの要素である、経済全体を通じての貯蓄率が高いことの理由のひとつとして、財政がつねに均衡していたこと、そして、消費的支出、とくに軍事費支出が僅少であったことをあげることができる。もし、この種の支出がかなり大きかったならば、あるいは、その上、経常支出が赤字公債によって賄われるようなことがあったならば、適正成長率は低くなり、インフレーションの困難につねになやまされたことであろう。

さて、イギリスも、日本の財政金融政策にみならって、産業の活力を増進し、成長産業の拡大を促進するように、もっと需要造的な刺激を与えなければならないというのが、ロンドン・エコノミストの結論であるが、需要造出が消費的財政支出に偏るならば、経済は低迷とインフレとのいずれかになやまされるだけであろう。一方、私的投資を活潑にすることが、高度成長の積極的要因であることはわかっている、イギリスの経済がそれを受け入れられる態勢にあるかどうか重要な点である。

莫大な公債残高をかかえ、充分すぎるほどの流動性に富むイギリスの経済と、戦中、戦後のインフレーションによって、ついで、近年の厳格な均衡予算の実施によって、極端に流動性に乏しい日本の経済とは、まったくかけはなれた態勢にあるのであって、イギリスの金融情勢を日本の金融正常化のお手本にしようとするのがあやまりであるのと同様に、また、イギリスの

ような豊かな流動性のもとで、日本のような強成長を期待するのにも無理である。ロンドン・エコノミストが日本を見習えというだけで、この基本的な態勢をどうするかについてまったくふれてないのは重大な欠点であるが、これは、笠氏が戦後の金融

構造にのみかかずらわって、空前の技術革新下の強成長という現実を十分に評価していないのと対照的である。

(東京学芸大学講師)